一海知義著

河上肇詩注

岩波新書

25

一海知義著

河上肇詩注

岩波新書

25

一海知義

1929年奈良県に生まれる
1953年京都大学文学部卒業
専攻—中国文学
現在—神戸大学教授
著訳書—「陶淵明」「陸游」(岩波書店)
「漢魏六朝唐宋散文選」(共著)
「漢魏六朝詩集」(共著)
「史記」
「漢詩の散歩道」(編著)
「続漢詩の散歩道」(編著)
「漢詩一日一首」

河上肇詩注　　岩波新書(黄版) 25

1977年10月20日　第1刷発行 ©

¥280

著者　一海知義

発行者　岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

はしがき

一海知義

一

『貧乏物語』や『自叙伝』の著者として知られる河上肇博士（一八七九―一九四六）は、マルクス主義経済学者であるとともに、詩人であり、歌人であった。そして晩年には、詩作のレパートリーに、漢詩までが加わった。

本書は、河上さんの漢詩作品のほぼすべてを紹介し、漢詩になじまぬ若い読者も親しめるように、ややくわしく注を施したものである。

河上さんの漢詩に、「六十初めて詩を学ぶ」と題する一首がある。

偶會狂瀾咆勃時　偶たま狂瀾咆勃の時に会い
艱難險阻備嘗之　艱難　険阻　備にこれを嘗む
如今覓得金丹術　如今　覓め得たり　金丹の術
六十衰翁初學詩　六十の衰翁　初めて詩を学ぶ

この詩の解について、くわしくは本書一五ページ以下を見ていただきたいが、詩中「金丹の術」というのは、中国の道士が黄金を練って不老長寿の薬を作ったと伝えられる、その術をさす。波瀾の前半生を終えた今、老後の糧、長寿の秘訣として、詩作をはじめた、文字通り「六十の手習」として漢詩の作法を学びはじめた、というのである。

河上さんが本格的に漢詩を作りはじめたのは、たしかに数え年六十歳のとき(一九三八年、昭和十三年)だが、漢詩に興味をもちはじめたのは、いつごろからか。河上さんが京都大学経済学部の教授時代、文学部助教授として河上さんと親交のあった小島祐馬博士の証言を聞こう。

(河上)博士が漢詩に興味を有たれたのは恐らく早くからのことであつて、大正の末年には私のところから『詩韻活法』など持つて行かれたことがあつた。ただ特に漢詩に親しむやうになられたのは未決に居られた頃からであつて、それは或人から差入れた鈴木豹軒先生の『白楽天詩解』を読んで大変興味を覚えられ、つゞいて陶淵明や王維や蘇東坡など読みたいから適当な解釈本があらば知らして欲しいと云ふことを、夫人を通じて言つて見えたことがあつた。出所後始めてお目に懸り談偶々此事に及んだ時、東坡の国訳本など実に無責任で若し自分に筆の自由があらば少し書いてやりたいくらゐであると言つて居られた。

(「読書人としての河上博士」、一九四八年世界評論社刊『回想の河上肇』所収)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大正末年といえば、河上さん四十七、八歳のころである。そのころは京大の教授だったが、昭和三年、その思想と行動のゆえに、大学当局から退官を迫られて、辞職。以後、著述と実践活動に専念し、日本共産党に入党。昭和八年一月、東京中野の隠れ家で逮捕される。治安維持法違反の容疑であった。

小島博士の文中「未決に居られた頃」というのは、昭和八年一月の検挙から、八月八日判決(懲役五年)、そして九月二十六日控訴取下げによる下獄までの、勾留期間をいう。昭和八年は、河上さん五十五歳。そのころから「特に漢詩に親しむやうになられた」というのである。

ところで、同じく右の文中に見える『詩韻活法』は、漢詩を読むための書物というより、漢詩を作るための手引きであろう。しかし、大正末年頃の河上さんの作品は、今のところ見当らない。「六十初めて詩を学ぶ」というのは、文字通りに受けとってよいように思う。ただ、作詩は別として、漢詩文に対して興味をもつようになるのは、小島博士のことば通り「かなり早くからのこと」である。たとえば、河上さんには、中国宋代の詩人陸游(号は放翁、一一二五―一二〇九)の詩に評釈を加えた『陸放翁鑑賞』(一九四九年三一書房刊)という、上下二冊のかなり独創的な著作があるが、その中で、「蓬門只欲爲君開――蓬門只だ君が為に開かんと欲す」という放翁の句について、次のようにいう。

私は少年の頃、この七文字が、海浜の山に沿うた親戚の別荘の門に、板に彫られて掲げ

てあるのを見て、いゝ句だなあと思つて居たが、今になつてそれは放翁のこの詩から出てゐることを知つた。（『陸放翁鑑賞』上冊、九五ページ）

そもそも河上さんは、一八七九年（明治十二年）の生まれ、いま在世ならば百歳に近い明治人である。しかも河上さんの「祖父はまた文芸の趣味を解し、漢詩や和歌を嗜んだ」し（岩波文庫版『自叙伝』第一冊、四八ページ）、さらに「須磨の伯父さんでも、亡くなつた大塚のお父さんでも、何かと云へば漢詩を作つたものです」（一九五八年第一書林刊獄中書簡集『遠くでかすかに鐘が鳴る』下冊、九六ページ）。河上さんは、そうした環境の中で、少年時代をすごしたのである。

……方今旧日本已ニ去リテ新日本将ニ生レントス而シテ英アリ露アリ毎ニ我ガ鬻ニ乗ゼント欲ス……而シテ我国工業盛ンナラズ……実ニ我ガ神州ノ為メニ悲ム可キ事実ナリトス……然ルニ世人常ニ尚武ヲ唱ヘ敢テ工業ノ盛ンニス可キコトヲ察セザルモノ比々皆然リトス後慮ナキモノト言フ可シ尚武論者以テ如何トナスヤ。（「日本工業論」、『自叙伝』第一冊、六〇ページ）

これは、河上さん数え年十二歳のときの文章だという。十二歳といえば小学校六年生である。われわれ昭和世代とは、そもそも漢詩文の素養が全く異ること、おのずから明らかであろう。

しかし、素養だけでは、漢詩は作れない。漢詩を読むのと、作るのとは、別のことである。漢詩を作るためには、素養のほかに、素質と努力、すくなくともこの二つが必要である。

河上さんが、若い頃から詩人的素質を顕著に示したことは、いくつかの資料が明らかにしている。一八九五年(明治二十八年、十七歳)、河上さんは山口高等学校の文科を選んで、その生徒となった。そして「将来大学に進んだら国文科に入るつもり」で、「ぜひ文名を天下に揚げなければならぬと思うようになって」いた。同人雑誌に拠って、短歌をつくり文筆活動にはげんだのも、その頃である。しかし、大学は法科を選んだ。高校のドイツ語教師登張竹風氏が、河上さんを自宅に呼び、「お前の素質は詩人だ、法律などやる柄ではない」といって、懇々と思いとどまるよう説諭したが、「一旦、こうと方針を決めたら最後、誰が何と言おうと容易に所志を曲げないのが、私の流儀である」と、東京帝国大学法科大学の政治科(当時、経済学部はまだなかった)に進んだ。この間の事情については、『自叙伝』第一冊「文科志望から法科志望に転ず」にくわしい。

以後、河上さんはいくつかの曲折をへながら、経済学者としての道を歩むのだが、後年、獄中生活を強いられたとき、そして、出獄後も刊行物への一切の執筆停止を余儀なくされたとき、河上さんの詩人的素質は、ふたたび頭をもたげはじめたのである。

努力という点でいえば、河上さんはこうと思えば短期間のうちに熱中し、集中する人であった。何事に対しても、それが政治であれ、学問であれ、文芸であれ、みずから選んだ対象への精進ぶりは、すさまじい。

あしかけ五年に及ぶ獄中での、読書制限はきびしかった。そこで河上さんは、読書の対象の一つに、制限外の中国の詩集を選ぶ。それも、『唐詩選』一冊を折にふれて読む、といった風ではない。陶淵明、王維、白楽天、蘇東坡の詩集、それも選本ではなく全集を、一冊ずつ差入れてもらって、つぎつぎと全作品を読んでゆく。そんな風だった。これがのちの作詩の基礎となる。

一九三七年(昭和十二年)に出獄した後の河上さんは、『漢詩作法』、『作詩資料及語彙』、『作詩法講話』、『漢詩自在』、『漢詩の新研究』といった書物をつぎつぎと買って、漢詩作りの勉強にはげんだ。ほとんど独学である。ただ一度だけ、「小島博士より紹介状を貰ひ居りし吉川幸次郎氏を白川の東方文化研究所に訪問し、今後時々漢詩漢文の分らぬ所につき教を受けたき旨を願ひて、間もなく辞去」、ということがあった(昭和十八年一月二十日の日記)。しかしそれは、文字通りただ一度だけのことだった。当時、河上博士六十五歳、吉川先生四十歳。

訪問を受けた吉川先生は、のちにその日のことを回顧し、簡潔に当時の河上肇像を描写した文章の中で、次のようにいう、「それ以後、私は博士の再びの来訪を待ちつづけたけれども、博士はついに来訪されなかった。若いものに迷惑をかけてはという、過度の思いやり(引用者注、戦時下、政治犯の刑余の身であることによる)の結果であったと、私は解釈している。そのうち終戦をむかえ、ついで博士の訃を聞いた。」(『陸放翁鑑賞』下冊の跋、のち筑摩書房版『吉川幸次郎全

集』第十八巻所収）

ほとんど独学によって漢詩の作法を学んだ河上さんの成果について、没後その漢詩作品を読んだ吉川先生は、

実作を拝見すると、平仄（ひょうそく）のくいちがいは、一〇パアセント位の割合いでないではないけれども、多くは不注意のあやまりであり、故意の逸脱ではなさそうである。用語もおおむね順当であり、九〇点以上をさしあげてよろしい。戦争中、将軍たちの漢詩として伝えられたものが、平仄もめちゃくちゃなのはもちろん、和語とも漢語ともつかぬのとは、全然ちがっている。（「河上肇博士の詩歌」、一九六五年筑摩書房刊『河上肇著作集』第十一巻付録月報、のち全集第十八巻所収）

という。

素養と素質、そしてたゆまぬ努力が、漢詩の専家に「九〇点以上をさしあげてよろしい」といわせるほどの漢詩人河上肇を生んだ、といってよい。

二

日本人の漢詩、また日本人が漢詩を作ること、について、河上さんには独特の主張がある。かなり長いが、河上さん自身のことばを聞こう。漢詩を作りはじめて三年、一九四一年（昭和

十六年）執筆の「閑人詩話」と題する文章の一節である（『河上肇著作集』第九巻所収）。

漢詩を読んで味ふのはいいが、韻字平仄に骨を折り、支那人の真似をして、自分で漢詩を作るのは、詰らぬ話だ、と云つた説が往々にしてある。（今記憶してゐるのでは、いつか日夏耿之助がそんな事を書いてゐたし、小杉放庵の『唐詩及唐詩人』にも、そんなことが書いてある。）しかし私は一概に之に賛成しない。現に私自身が、近頃は平仄を調べたり、韻を踏んだりして、漢詩の真似事をしてゐる。私はそれを必ずしも馬鹿々々しい事とは思はない。

何故漢詩の真似事をするのか？　（真似事と云ふのは謙遜ではない、その意味は段々に述べる。）

何よりもの理由は、漢字と漢文調とが自分の思想感情を表現するに最も適当する場合があるからだ。しかしそれだけなら仮名混りにしてもよささうなものだが、仮名を混ぜると眼で見た感じが甚だ面白くない。で、どうせ漢字の使用に重きを置くなら、仮名混りにせず漢字ばかりにして見たいといふ要求が生じ、どうせ漢字ばかりにするのなら、一応支那人の試みた漢詩の形態に拠つて見よう、と云ふことになるのである。

しかし一応は漢詩の形態を取つて見ても、吾々は之を棒読みにするのではなく、日本流に読むのだから、音律の関係から支那で発達した色々な作詩上の規則を、一々遵守する必

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

要はない。それが日本の詩として、日本読みにするために、日本人の作る漢詩の特徴たるべきものである。

〔中略〕唐代の詩人が音律の上に費したであらうやうな様々の苦心を、千載を距てた今日、全く言語を異にする異邦人たる日本人が、一々細かに吟味して、それらをば自分の作る詩の上に出来得るかぎり再現しようなどと努力することは、特別の専門家は別として、普通の人にとつては全く意味のなき徒労であらう。

それどころか、従来漢詩を作る人が誰でも気にして来た平仄の規則なども、場合によつては、無視して差支ないことであらう。それが昭和の日本人の作る漢詩の心得である。かういふ風に私は考へる。

議論はまだつづくのだが、河上さんらしく大へんに正直な、しかし、戦時中の将軍たちや戦後でいえば田中角栄氏あたりがよろこびそうな、いささからんぼうな意見である。吉川先生も、「少し乱暴な説」という(前出「河上肇博士の詩歌」)。ところが、「実作を拝見すると、平仄のくいちがいは、一〇パアセント位の割合いでないではないけれども、多くは不注意のあやまりであり、故意の逸脱ではなさそう」なのである。

河上さんは、何事に対しても、いいかげんにしてすますことの大きらいな人であった。作詩に対しても、いいかげんで中途半端な態度はとらない。もちろん、初期の作品の中には、漢詩

本来のリズムや平仄などの点で、規格に合わぬ未熟なものがなくはない。たとえば、獄中の作と伝えられる、漢詩作品としては第一作(本書二ページ)の第一、二句、

年少夙欽慕松陰　　年少　夙に松陰を欽慕し
後學馬克斯禮忍　　後に学ぶ　馬克斯・礼忍

若いころ早くから吉田松陰を敬い慕い、後年、マルクス・レーニンを学ぶようになった、というのだが、最初の作であるため、平仄もととのえられず、またこの句作りでは、漢詩本来のリズムにあわない。七言の詩は、上四字、下三字と切れるのが通則だが、「欽慕」「馬克斯」の語、上四下三の間にまたがって、通則からはずれる。中国人の詩を例にあげれば、

渭城朝雨　浥輕塵　　渭城の朝雨　軽塵を浥し
客舎青青　柳色新　　客舎青青　柳色新たなり

(王維「元二の安西に使いするを送る」)

これが、漢詩本来のリズムである。また、たとえば、「浮沈を覚えず」と題する、これまた初期の詩(一四ページ)、その第一、二句、

脱得狂瀾地　　脱し得たり　狂瀾の地
隨流游魚心　　流れに随う　游魚の心

平仄の法則からいえば、第一句が「仄仄平平仄」だから、第二句はその逆の「平平仄仄平」

となるのがふつうである。しかるに「随流游魚心」が、「平平平平平」と、すべて平字（ひょうじ）であるのは、規格から遠くはずれる。そのほか、詩中に若干の和語をまじえる作品などもあるが、しかし、そうした例はあまり多くはないのであり、吉川先生のことば通り、平仄、用語ともおおむねは順当である。本書では、規格からの逸脱について、いくつかのケースを除き、丹念に指摘することはしなかった。散文の詩題（漢文、ときに和語をふくむ）についても、同様である。なお、平仄その他漢詩の法則についてくわしく知りたい方は、その方面の専門書、たとえば小川環樹著『唐詩概説』（岩波版中国詩人選集別巻）などを参照していただきたい。

さきに引いた「閑人詩話」の文中、私が注目するのはむしろ次の箇所、すなわち、漢詩を作る「何よりもの理由は、漢字と漢文調とが自分の思想感情を表現するに最も適当する場合があるからだ」、という箇所である。河上さんにとって、作詩は遊びや娯楽ではなく、ましてやこけおどしなどではなかった。晩年の心境を吐露するのに、最もふさわしい表現形式の一つとして、コンパクトでしかも含蓄の深い「漢詩」を選んだのである。したがって、河上さんの漢詩の詩想は、借り物でなく、その作品は、独自のアクチュアリティに富んでいる。そこがすぐれた点だと、私は思う。河上さんの短歌一首、

われは歌よみの歌を好まず思ふことありて歌へる歌を好む

以下、河上さんの漢詩の、特徴のいくつかについて、のべてみよう。

三

河上さんの漢詩のおおむねは、戦闘の詩でなく、休息の詩である。より正確にいえば、戦闘のあとの休息の詩であることに、傾く。

一九三七年(昭和十二年)六月十五日、河上さんは刑期を終えて出獄した。出獄にあたって、一篇の手記を発表している(岩波版『獄中日記』第二冊所収)。

私は今回の出獄を機会に、これでマルクス学者としての私の生涯を閉ぢる。この一文は即ちその挽歌であり墓碑銘である。――私はこれまで一個の学究として、三十年攻学の結果漸くにして贏ち得た、自分の学問的信念に殉ぜんが為め、分不相応な事業に向つて聊か努力を続けて来た。しかし微力の私は、暮年すでに迫まれる今日、最早やこれ以上荊棘を歩むに耐へ得ない。私はもう之で一学究としての義務を終へたものと諦め、今後はすつかり隠居してしまつて、極く少数の旧友や近親と往来しながら、刑余老残の此の瘦軀をただ自然の衰へに任かすの外なからうと思ふ。既に闘争場裏を退去した一個の老癈兵たる今の私は、たゞどうにかして人類の進歩の邪魔にならぬやう、社会の何処かの隅で、極く静かに呼吸をしてゐたいと希ふばかりである。――歌三首あり、併せ録して人の嗤ふに任かす。

ながらへてまた帰らむと思ひきや捨てにしいのち家苞となし
長き足をらくにすわれと吾妹子が縫うて待ちにし此の座蒲団よ
巌清水あるかなきかに世を経むとよみいでし人のこころしのばゆ

河上さんが漢詩を作りはじめたのは、この翌年である。それが休息の詩に傾くのも、当然といえば当然であろう。しかし、休息の詩だといっても、すべてを放棄した怠惰の詩ではない。河上さんは、「転向」して出獄したのではなかった。その『獄中日記』は、市販のいわゆる『自由日記』に書かれているが、開巻第一ページに、

『自由日記』は『不自由日記』である。

としるし、出獄前夜、次のようなことばで、日記をむすぶ。

河上肇万歳！　マルクス主義万歳!!

これを負け惜しみだという人もあろう。しかし河上さんは、獄中で取調べの検事にむかって、長年つちかって来た学者の信念は曲げられぬといい、また「一身の利害得失によつて自分の学問上の立場を左右するほどなら、私は最初から何を苦しんでマルクス主義を信奉するに至つたであらう」と書いている（「獄中贅語」、岩波版『獄中日記』第二冊所収）。出獄の手記は、転向宣言でなく、引退、あるいは没落の宣言であり、そのことによって「マルクス主義理論」をあくまでも擁護したのだ、とする河上研究者の説に、私も同意する。

河上さんの「信念」は、休息の詩であるはずの漢詩作品の中でも、ときに頭をもたげることがある。たとえば、

傷むこと莫かれ　時事の否なるを
水到りて　渠成るあるべし

と、日中戦争下に平和の到来を予見してうたうのが、それであり（一二ページ）、また、

如今　奇書を把り得て坐せば
尽日　魂は飛ぶ　万里の天

と、これも戦時中、エドガー・スノー著『中国の赤い星』の原書を読んで心おどらせる場合が、それである（三九ページ）。

このことは、日本語で書かれた詩の場合、いっそう顕著だといえる。たとえば、一九四四年（昭和十九年、すなわち日本敗戦の前年）の作「甲申正月述懐」の一節、

曠古の大戦／世は狂へるがごと／わがいほは／ひるなほしづか／人はかかるさかひを哀めど／われ敢て黎明の近きを疑はず

河上さんは、日本の敗戦を予見していた。だからこそ、敗戦の日、次の一首が思わず口をついて出たのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com